

# 漱石の『文学論』における科学の 意味について

立花太郎

## 1

夏目漱石が1900年（明治33年）9月以来のロンドン留学を了えて帰国したのは1903年（明治36年）1月であった。そしてその年から東大において「英文学概説」の講義を行った。その講義の一部、「内容論」を中川芳太郎が筆写し、それに漱石が筆を入れたのが「文学論」（1907年）である。

「文学論」は一口に云えば漱石が講演「私の個人主義」（1914）において述べた“自己本位”の立場<sup>1)</sup>にたつて、文学とは何かを体系的というよりは、なかばエッセイ風に論じたもので、その考察の方法を心理学に拠り、その視野を社会学にまで拡げた、文学の科学的研究ともみることができる。今日の言葉でいえば一種の総合研究ともいえよう。

「文学論」は文字通り文学のための書であるが「世界を如何に観るべきやと云ふ論より始め」、人生論、文明論にも及ぶ壮大な意図を秘めて書かれた文学論である。したがってそこには科学とは何かという問題も取りあげられている。それは文学とは何かを説明するために、単に引き合いに出されたにすぎないが、明治期の代表的知識人・文人の科学観をそこからうかがい知ることができるという点で「文学論」は科学者にも興味ある論考である。

漱石の時代、つまり19世紀後期から20世紀前期にかけてのわが国の自然科学はちょうど西欧の科学を受容しつつ次第に自立の兆しが見えてきた時期であった。同時に科学自体もいわゆる20世紀の科学へと大きく変わりつつあるときであった。そういう科学史事情を背景にして「文学論」の中に書かれている科学の意味を吟味するのが本稿の主題である。そのさい、次の二点を特に留意する。

(1) すでに小宮豊隆<sup>2)</sup>をはじめとして漱石文学の研究者の間で定説となっていることであるが、「文学論」の構想には一人の科学者池田菊苗がかかわっていたこと。

(2) 東洋の伝統的思想の影響のもとに育った明治の知識人がそれと対蹠的な位置にある西欧の科学思想をどう受けとめたかという問題の一例がここにあること。

明治期において日本の科学者および一般社会が西欧の科学をどのように受容したかは日本の科学史の一つの課題であるが、それには科学者と対極的位置にある文学者が直接科学文明社会の“西洋”に触れ、また科学者と接してどのような科学観をもったかという点もまた考察に値するであろう。

## 2

「文学論」のなかで科学の説明が始めて現われるのは「第三編、文学的内容の特質」においてである。そこで、文学と科学とは相互に「対立相反」の意味をもつ語として捉えられ、次のように説明されている<sup>3)</sup>。

「凡そ科学の目的とするところは叙述にして説明にあらずとは科学者の自白により明かなり。語を換えて云へば科学は“How”の疑問は解けども“Why”に応ずる能はず、否これに応ずる権利なしと自認するものなり。即ち一つの与へられたる現象は如何にして生じたるものなるかを説き得れば科学者の権能ここに一段落を告ぐるものなり。」

科学に対する同様な見解は「文学論」以後の講義、「十八世紀英文学」をまとめた「文学評論」(1909)のなかにも見えている。そこでは上記の記述をくりかえした後、次の例を加えて説明を補っている。

「例へば茲に花が落ちて実を結ぶといふ現象があるとすると、科学は此問題に対して、如何なる過程(プロセス)で花が落ちて又如何なる過程(プロセス)で実を結ぶかといふ手続を一々記述して行く。然し何故(Why)に花が落ちて実を結ぶかといふ、(然かならざるべからずといふ)問題は棄てて顧みないのである。一度び何故にといふ問題に接すると神の御思召であるとか、樹木が左様したかったのだとか、人間がしかせしめたのだとか所謂 Will 即ちある一種の意志といふ者を持て来なければ説明がつかぬ。科学者の見た自然の法則は只其儘の法則である。」

ここで漱石の述べている科学は哲学的には経験論ないしは実証論にもとづく記述主義の立場から解釈された科学である。当時の一般の科学者は必らずしも意識して科学をこのように理解していたわけではなかった。素朴実在論的な範囲で Why にも応じていたのである。その場合、科学者は仮説をたてた。その仮説の意義をめぐって、科学者の間で論義がかわされていたのはこの時代であった。そうしてみると漱石の科学観には何か特別な背景があったことを示唆している。

## 3

漱石がロンドンの下宿で「文学論」の構想を練っていた時期に、西欧の科学者たちは科学の本質をどう見ていたかを一瞥しておく必要がある。この問題については以前から、認識の起源に

関する二つの立場—理性論（合理主義）と経験論<sup>4)</sup>（実証主義）—から論議が行われていた。

しかし19世紀後期になって、科学の法則を客観的な自然の真理と見なす従来の考え方にかわってこれを感覚要素間の関係とみなす経験論的な科学観が優勢となってきた。それにはニュートン力学を基礎とする原子論的あるいは機械論的科学観への懐疑が高まる一方で、経験論的でしかも全体論的視野を備えた熱力学の体系化が大きく影響した。

もともと経験論はベーコンを祖とし、17世紀のロック、18世紀のヒュームやバークレーなどイギリスの学者によって展開され、それは大陸のコントの実証論とともに19世紀のイギリスの科学哲学の主要な思潮となった。その影響を受けた科学者の一人として、K.ピアスン（Karl Pearson）の名をあげることができる。

ピアスンは数理統計学、生物測定学の分野で名を残した科学者であるが、それよりも彼の名を、特に英語圏の一般市民の間にまでひろめたのは、科学の意味を平易に説いた著作「科学の文法」（The Grammar of Science, 1892）によるものであった。同書は後日、1937年には“Everyman's Library”の中に収められた。またそれに先だって1933年には「科学概論」と題して平林初之輔による邦訳が刊行された。

ピアスンはこの書において科学の機能は事実の分類、事実と事実の前後関係およびその相対的な重要性を認識することであると、科学をして科学たらしめているのは、その方法にあるのであって、得られた知識にあるのではないと述べた。彼が特に繰り返えし強調したのは、科学は現象の“how”を記述することができるだけであって、決して“why”を説明することはできないとしたことであった。そして科学から神学や形而上学の支配が滑りこみそうな要素を一切消去すべきことを強調したのである。

ピアスンは19世紀科学の最大の課題に属する原子とエーテル（空間の媒質）の問題に対しては、両者とも幾何学的な面とか空間と同様に科学的概念であって人間精神のうちにのみ存在し、感官印象を科学的に記述する形式に属するとした。原子とエーテルは「物それ自体」（カントのいう意味の）でもなく、また知覚できるまでは実在とはみなせないが、思惟を節約することのできる有効な観念ではあると記している。

ピアスンの所論は19世紀の経験論ないし実証論の典型である。その後の原子論、エーテル論の行くえ<sup>5)</sup>を考えると「科学の文法」は啓蒙書の域をこえて問題提起の書でもあった。

#### 4

ピアスンの書を読んで漱石の「凡そ科学の目的とするところは叙述にして説明にあらず」という文章を見返えすと、これがピアスンから出ているということは容易に察知される。ちなみに“*The Grammar of Science*”から関連ある文章<sup>6)</sup>を抜きだせば次の通りであって、漱石がピアス

ンから引用したことは両者の文章を比較すれば歴然としているであろう。

All science is description and not explanation. (p. 5)

The scientific law is a description, not a prescription. (p. 77)

The discussion of the previous chapter has led us to see that law in the scientific sense only describes in mental shorthand the sequences of our perception. It does not explain *why* those perceptions have a certain order nor *why* that order repeats itself; the law discovered by science introduces no element of necessity into the sequence of our sense-impressions; it merely give a concise statement of *how* changes are taking place. (p. 99)

Science is the description in conceptual shorthand (never the explanation) of the routine of our perceptual experience. (p. 279)

漱石がピアソンの書を読んだことは、それが漱石山房蔵書目録（漱石全集に収録）に入っており、さらにそれに書き入れがしてあることから明らかである。漱石が留学したのは1900年であり、それは同書の第2版が刊行された年であった。

それでは漱石はどのようにしてピアソンを知ったのであろうか。それは「文学論」成立にかかわる興味ある問題である。それを知る一つの有力なる手掛りが最近、岡三郎(青山学院大学教授)によって発表された。その論文<sup>7)</sup>の一部には次のように記されている。

「とくに注目すべき事実は、漱石の購入する文献が文学プロパーから科学・医学・社会学・倫理学へと拡大されてゆく最初の日の明治34年9月18日に、Pearson の *The Grammar of Science* が購入されたのであるが、じつは同じ本が池田菊苗蔵書のなかにあり、購入したのが同じ年の1月と記されていることである。Pearson を読むことをすすめたのが池田菊苗であったことは確実であろう。」

おそらく漱石がピアソンを入手した過程は岡の推察の通りであろう。それでは「自己本位」の漱石によってピアソンがとりあげられたのはなぜであろうか。

## 5

漱石がピアソンの科学論、すなわち経験論の立場からの科学論を受け入れたのには、漱石の側にそれだけの素地がすでに用意されていたからにはほかならない。漱石は「思い出す事など」(1911)の中で、

「よし物理学者の分子に対する如き明瞭な知識が、吾人の内面生活を照らす機会が来たにした

所で余の心は逐に余の心である。自分に経験の出来ない限り、如何な綿密な学説でも吾を支配する能力は持ち得ない。」

と述べていることからわかるようにピアソンを不用意に引用するような漱石ではなかったはずである。

漱石は「文学評論」の中の「十八世紀における英国の哲学」においてロック、バークレー、ヒュームの哲学を詳しく紹介しており、このイギリス経験論を批判しつつも自己の嗜好によくかなった哲学としていることがわかる。ピアソンはイギリス経験論の流れを汲んでおり、漱石がそれを取りあげて引用したのもそのためであろう。ただし、村岡勇の編集になる漱石の文学論関係のノート<sup>8)</sup>にはピアソンの科学思想のことは書き記されていない。

## 6

ここで興味のあるのは「文学論」の構想に深いかかわりを持ち、また漱石にピアソンを教えた科学者池田菊苗もまた経験論者であったという事実である。ただし池田の場合はドイツに留学していたので、その経験論はマッハの流れを汲むものであった。

マッハはピアソンよりも早く1871年に科学の哲学的基礎を経験論的に考察し、物理学の対象は感覚（知覚）間の関係を法則化することであると、現象がどのようにして起るかを思考の経済を図って記述するのが物理学の任務とした。その影響は大陸の科学者の間に広くひろまり、20世紀初頭にかけて科学思想の主潮をなした。

ドイツの化学者で化学の中に物理化学とよばれる総論の体系をつくったオストワルド (Wilhelm Ostwald) はマッハの影響を最も強く受けた一人であり、経験論を踏まえて彼の説くエネルギー一元論はその後の化学の進路に大きな影響を残した。

池田菊苗<sup>9)</sup> は東大助教授として、1899年物理化学の研究のためオストワルドのもとに留学した。池田はそこで今日でも文献に残っているほどの優れた業績をあげた後、1901年ドイツを去ってイギリスに渡り、しばらくロンドンに滞在したのち帰国した。池田が漱石と同じ下宿にとまり、漱石の日記に記されているような議論をかわしたのはその間のことであった。

池田が経験論者であったことは帰国後から1908年頃までに書いた数篇の論文やオストワルドの著書の翻訳に付けた訳者注から明かである。池田はマッハやオストワルドと同じ経験論にもとづいて化学理論から原子説を排した（原子の実在が確定したのは1910年前後のことで、それまでは原子は実体としては認識されていなかったため科学理論のなかで原子をどう扱おうかが科学哲学上の問題になっていた）。

わが国の物理化学の発達史を研究した大沼正則<sup>10)</sup>（東京経済大学教授）によれば池田の物理化学の仕事は留学以前から既にオストワルドと同じ傾向を示していたという。このことは池田の思

想にはもともと経験論的な傾向があったと解釈される。そうであればオストワルドの研究室への留学によって、池田の経験論は一層の磨きがかかったということになる。後年、教授となつてからの池田は学生に対してもよくマッハの哲学の話を<sup>11)</sup>したという。

## 7

1901年5月5日、この日初めて池田はロンドンの漱石の前にその姿を現わした。漱石の日記にはそれからたびたび池田との会話を楽しんだことが記されている。漱石は池田を“偉い哲学者”と評している（「処女作追懐談」1908）が、そのときの池田はすでに経験論に傾倒していた“哲学者”であったはずである。そうとすれば池田の口からマッハやピアソンの名がでてきたと想像しても決して不自然ではなからう。

文芸評論家の瀬沼茂樹<sup>12)</sup>はロンドンの下宿にこもって、ひたすら古今の英文学書の耽読に日を過ごし、交人との交流もほとんどなかった漱石と池田との出会いとその意義を次のように記している。

「ただ一つライプチヒ大学における留学を終えて、帰途たちよった化学者池田菊苗との三月たらずの交友が、学生時代の正岡子規との親交に匹敵する重大な影響を与え、一時、英文学書をしまい、心理学、哲学、社会学などの書物を耽読させた。誇張していうならば、漱石の学問とその方法は池田菊苗との邂逅によって、初めて自覚させられたといつてよい。」

「文学論」の執筆には池田の刺激にまつところが多かったことは、すでに早くから小宮豊隆によって指摘されていたが、その刺激というのは科学的な研究方法のことであるとは上記の瀬沼の文章の示す通りであろう。広田鋼蔵<sup>9)</sup>（阪大名誉教授）はそのことを池田の化学者としての独創的な業績と寺田寅彦の「夏目漱石先生の追憶」（1932）の中の一文を引用して裏づけている。

ここで筆者が特に指摘したいことはその科学的方法というのはマッハやピアソンの経験論にもとづく方法だということである。それが「文学論」のなかの科学に対する経験論的な意味づけとなっており、また「文学論」自体の構成法にもそれが次のように現われている。

「文学論」はまず「凡そ文学的内容の形式は（F + f）なることを要す。Fは焦点的印象又は観念を意味し、fはこれに付着する情緒を意味する」という漱石文学の第一原則からはじまっている。漱石の鑑賞と経験から導かれたこの文学上の原則をまず掲げてから、それをもとに個々の問題を論じてゆく、この構成は力学や熱力学のそれとよく似ている。「文学論」が文学の科学的研究といわれることがあるのもこのスタイルからきている。

漱石が文芸の世界では経験論者といわれているが、池田もまた科学の世界において経験論者であった。この共通の思想的基盤があったからこそ、この文学者と科学者の間に心の通う場が成立し、経験論的な方法論による「文学論」の誕生および科学の解釈となったのであろう。西欧文化

の受容過程において漱石は「自己本位」の立場を自覚したが、池田の後年の仕事である旨味成分の研究の場合にも「自己本位」の立場がはっきりあらわれている。

## 8

「文学論」において科学と文学を比較したあとには文学者と科学者の態度の差を論じた文章がつづいている。

「次に来るべき文学者間の差違は其態度にあり。科学者が事物に対する態度は解剖的なり。由来吾人は常に通俗なる見解を以て、天下の事物は悉く全形に於て存在するものなりと信ず。即ち人は人にして、馬は馬なりと思ふ。然るに科学者は決して此人或は馬の全形を見て其儘に満足するものにあらず、必ずや其成分を分解し、其各性質を究めざれば已まず。即ち一物に対する科学者の態度は破壊的にして、自然界に於て完全形に存在する者を、細かに切り離ちて其極致に至らざれば止まず。単に肉眼の分解を以て満足せずして百倍乃至千倍の鏡を用ゐて其目的を達せんとす。複合体に甘んずることなく、之を原素に還し、之を原子に分かつ。さて如此き分解の結果は遂に其主成分より成立せる全形を等閑視すること屢にして、又之を顧るの必要なきことも或場合に於ては事実なりと云ひ得べし。例へば、彼等は水を分解して  $H_2O$  となすとき、彼等の要するところの物はHとOにして  $H_2O$  より成立する水其物にあらざるなり。」

ここに出てくる解剖という言葉は今日いう分析ないし解析のことである。「水を分解して  $H_2O$ …」は水を分析しての意味である。要するに、これは現代における科学批判、特に科学技術による環境破壊が一つには科学者の全局的視野を欠いた分析的態度一辺倒によるとする批判、あるいは各種の機器分析のみに頼る現代の医師の診断に対する批判などと重ね合わせて読まざるべき文章である。今日の科学技術批判の論調は80年前の漱石のこの論旨とすこしも変わらないことをここで指摘しておきたい。

## 9

上記の科学者の態度に対して文学者の態度についての文章がつづいている。

「しからは文学者の用ゐる解剖は如何。小説家は性格を解剖し、物象を描くものは其特長を列挙す。若し文学者に此態度なければ、物の選択取捨を要するにあたり、文学的に必要な部分を引き立たしめ、必要ならざる部分を後景に引き込ましむること能はざるべし。即ち物を叙して、これを活動せしむること能はざるべし。されども文学者の解剖と科学者のそれと異なるところは、前者の態度は常に肉眼的にして顕微鏡的ならざるにあり、又観察に抛りて実験を用ゐざるにあり。」

これにつづいて次のような奇怪な文章が出てくる。

「例へばかの物理学者の所謂“Conceptual Discontinuity of Bodies”(物体の概念的中断性)の議論を見よ。其理由に曰く、凡ての物体には弾力あり、空気の如きも、これを円壩に入れて圧搾することを得べし、これ凡て物体の質は精密の意味に於て不断的にあるざるを証するものなりと仮定し得る所以なりと。此の如きは文学者の与り知らざる所とす。」

この難解の文章は実は“The Grammar of Science”第V章、8節の次の文章によく対応している。

“Foremost among the physicist’s reasons for postulating the discontinuity of bodies is the elasticity which we notice in all of them. Air can be placed under a piston in a cylinder and compressed: a bar of wood can be bent—in other words, a portion of it squeezed and another portion stretched.”

これを意識すると次のようになる。

“物理学者が物体の不連続的構造（訳注：原子または分子と空虚からなること）を仮定する理由として、まず第一に挙げるのは、すべての物体に見られる弾性である。たとえば空気は円筒につめてピストンで押すと体積を圧縮することができる。また木の棒は（両端に力を加えて）曲げることができる。このさい棒の一部（内側）は圧縮され、他の部（外側）は伸張される。”

この9節の表題が Conceptual Discontinuity of Bodies となっているのであるが、この意味は物体は原子分子と空虚からなるので不連続的構造をもつということである。ここに Conceptual（概念的）という言葉が使われているが、これは物体の構造に対するこのような原子論的解釈は一種の科学的概念であって、決して実際の構造がそうなっているという意味ではないとするピアソンの主張を表わしているのである。事実、1900年頃にはまだ物体の原子論的構造を示す直接の証拠はなかった。それは1912年ドイツのラウエ（M. Laue）による結晶のX線回折以向の研究によってはじめて確かめられた。

科学は経験にもとづいているとはいえ、その進歩は科学的概念の先導によるのである。この点で文学と科学は対立相反するのであるが、それについて「文学論」には次の文章がみえている。

「ここに一言すべきは科学者とても時に物の全局を描かんと力むることなきにあらざ（中略）同じく物の全局を写さんとする場合に於ても、科学者は概念を伝へんとし、文学者は画を描かんとす。換言すれば前者は物の形と機械的組立を捉へ、後者は物の生命と心持ちを本領とす。」<sup>13)</sup>

現在、科学者は上記の本領をますます発揮してきて、たとえば人間を分子機械にまで還元してきた。もちろん科学者が捉えることができるものは人間の「機械的組立」だけに限られているが、科学と文学の関係は「文学論」以後、新たな段階に入ってきたといえよう。



漱石の死は1916年（大正5年）であった。それはちょうど科学が大きく変わりつつある時期であった。そして相対性理論と量子論（不確定性原理）が確立されると、それらはともに従来の認識論に新たな問題を提起した。それは漱石がいう“観念の認識的要素（F）”の意味に影響を与えているはずである。

「文学論」は19世紀後期の科学思想の一断面をよく写した史料とみることができる。これが本稿の結論である。

## 10

本稿の付録として、漱石門下の唯一人の物理学者である寺田寅彦の科学思想に触れておくのも意義なくはないであろう。

寺田は生前、物理学に対しては独自の見解をもち、それを多くのエッセイに書き、またそれを研究の中に生かした。しかし科学論としてのまとまった著作はない。ただ、寺田の死後発見された未完の草稿「物理学序説<sup>14)</sup>」（1920年、大正9年起稿）のなかに本稿に多少関係のある寺田の科学観をうかがい知ることができるので、その部分を引用しておく。

「個々の方面の事実が個々の法則にまとめられたものは確かに事実の記載である。あらゆる可視物体の運動から帰納された運動法則はあらゆる個々の運動を引くためた経済的な記載である。これによって遊星に関する法則や落下の法則や振子の法則を別々に述べる代りになる。しかし物体の如何なる機巧によって、この法則通りの運動が起るかは少しも分らない。こういふ意味で云へばこの法則は How? の答で Why? の答ではない。しかし振子の運動周期がその長さの平方根に比例するといふ事実をニュートンの法則から演繹せられるといふ事について云へばこれは Why? の答解であると云って差支へない。しかし又強いて How? だと主張したければしても勿論悪くない。一般法則の中に個々の法則が含まれている。その含まれ方が問題になるからである。」

この文章はマッハやピアソンを意識して書かれていることは明かである。寺田の科学思想はこの「序説」を収めてある「寺田寅彦全集、第九巻」の後記で編集者が要約しているので次にそれを引用しよう。

「著者（寺田）はポアンカレやマッハの影響を受けてゐるとは自らも述べてゐるとほりであるが、プランクなどの唱へる人間主義からの解放の思想の盲信を戒めてゐるのは特筆すべきことであらう。自然科学の理想は人間的要素を脱離することであるといふのがプランクなどの唱へる人間主義からの解放である<sup>15)</sup>。それはそれに違ひないけれども、此の思想に盲従するの余り自然科学に於ける感覚の役割を軽視するが如きことは大いなる心得違ひであるといふのが著者の意見である。経験は科学の生みの母であるとは著者の常に言ふところであつた。」（1951）。

寺田のこの思想は門下の中谷吉郎によって受け継がれ、“科学の真理は自然と人間の協同作品である”という言葉<sup>16)</sup>で表わされた。

漱石と親しく接した科学者は寺田寅彦と池田菊苗の二人である。寺田は割れ目の研究などに見られるように、物の形に対する日本人的な感受性から独自の物理学を展開し、池田は日本人に特有な味覚を通して旨味成分の発見に成功した。いずれも明治以来わが国の学界に抜きがたくしみつけた「他人本位」の風潮から脱して「自己本位」によってあげられた独創的な業績であった。

### 注 と 文 献

- 1) 西洋人の言説なら何でも妄信し、しかもそれを振舞わず「他人本位」（これが明治以来の日本の文明開化の特徴）に対して、日本人としての自己の経験、考察をもとに物事を判断する態度を漱石は「自己本位」とよんだ。
- 2) 小宮豊隆、漱石全集（岩波版）の中の「文学論」の解説。
- 3) 本稿における「文学論」からの引用は「漱石全集」（岩波版、1965）に拠っている。ただし漢字の一部は現行の活字にかえてある。
- 4) 経験論と実証論とは共通の立場をもっているので、本稿では両者を一括して経験論と記した。
- 5) 前世紀の原子論は今世紀の原子物理学を、そしてエーテル論は場の理論を生んだ。ピアソンはまたマッハとは別にニュートン力学における絶対空間、絶対時間を批判した一人であった。
- 6) ここに記載したページ数は Everyman's Library 版（1937）からとった。
- 7) 岡三郎、英語青年, Vol. CXXX (No. 5), 225 (1984).
- 8) 村岡勇編、「漱石資料—文学論ノート」岩波、1976.
- 9) 池田を漱石との関連で紹介してあるのは次の二著である。
  - a. 竹村民郎、「講座 夏目漱石」（三好行雄ほか編）、1巻、有斐閣、1981.
  - b. 広田鋼蔵、「旨味の発見とその背景」非売品、1984.
- 10) 大沼正則、東京経済大学人文自然科学編, No. 18, p. 101 (1968); 同誌, No. 19, p. 91 (1968).
- 11) 柴田雄次、化学, 16, 583 (1961)。池田の化学の講義が哲学から始まったことを赤堀四郎（蛋白質・核酸・酵素, 30, 152 (1985)）が回想しており、また林太郎（化学史研究, No. 13, 1 (1980)）によって紹介された池田の講義ノートで明かに示されている。
- 12) 瀬沼茂樹、「夏目漱石」p. 38, 東大出版会, 1970.
- 13) 「文学論」には文学的および科学的記述に関しては、Winchester, “Principles of Literary Criticism,” p. 52 以下参照の指示がある。
- 14) 「寺田寅彦全集 第九巻」岩波, 1951.
- 15) これはプランク (M. Planck) のマッハ批判に関連して述べられた主張である。これとは意味は違うが「文学論」には次のような科学者と文学者の比較論が出ている。
 

「更にまた科学者の慾するところは概括にあり、個々別々の場合を綜合して之を統ぶる主義、法則の発見に存す。此故に色彩なく音響なく感情あることなし。反之文学者は此等の冷やかなる主義法則を以て満足すること能はず、これに肉を付け血を通はしめて、広くこれを世に示さんと慾す。されば科学者と文学者は此点に於て理学者対工学者の關係に似たり。」。漱石は文学理論には科学法則を含まないわけにはゆかないが文学は科学でないといっている。これに対して寺田は科学を創ってゆくうえにも漱石のいう (F + f) の大切な役割を指摘していたといえよう。
- 16) 中谷吉郎、「科学の方法」（岩波新書）、p. 197 (1958).